

# 終戦後の玉砕

矢島進一

野方三丁目

我が独立歩兵第四七大隊（秘匿名Ⅱ中支派遣矛第二三一八部隊）は、戦わずして無条件降伏という建軍以来初めての衝撃的な敗戦に未曾有の混乱が予想され、その対策命令が発令されない前に、終戦の日より誠に不幸な戦闘が各方面で起こった。

蘇州北方地区で対米迎撃作戦のため陣地構築中であった部隊の主力並びに分遣各中隊の宜興の部隊本部（蘇州より西約八〇キロ、大湖西岸寄り）への撤収作戦の前面に、新鋭の新四軍（共産軍で揚子江から南岸の日本軍兵器は蒋介石直轄の国府軍が接収することになっていた）が一斉に蜂起、戦意なき第四七大隊の武装解除を目指し、戦時中に見られぬ強力な攻撃が開始された。

宜興の部隊本部は連日迫撃砲の攻撃を受け、更に撤収の遅れた分遣中隊も猛攻を受け、攻撃も出来ず撤退も進まず正に孤立無援、手榴弾の投げ合いによる白兵戦が毎日続いていたので、無線手は生文により「SOS」を発信、飛行機による爆撃要請を打電し続けた。

天佑か神の助けか、奇跡にも八月二〇日を過ぎた午後、爆弾二、三個を胴体に付けた戦闘爆撃機が飛来、爆撃と機銃掃射で虎口を脱し、部隊本部に遅れて集結できたが、終戦後一週間を経過しているにも拘わらず、何れの航空隊が爆撃機を発進させてくれたか、戦局の落ち着いた時点で各方面に照会したが全く不明、後々までの語り草となった。

宜興の部隊本部の東南台地は既に新四軍の大軍が布陣、我が部隊の動静は眼下にあつて一触即発の危険な状態であり、何時来襲されるか終日怯えながら長い日を送っていた。

九月に入り、新四軍との関係も小康状態になり落ち着いたかに見えたので、蘇州の第六〇師団司令部に集中営（捕虜收容所）への集結その他連絡のため、K大尉率いる重装備五〇名の一個小隊が派遣されることになった。

総て安全を期し、九月八日ほぼ満員のヤンマー船で出発。九月十一日夕刻帰港の予定で全員元気で出発したが、これが我が四七大隊に於ける戦史の最後に誰しも予想できなかった慚愧に

たえない誠に不幸な事件が発生した。

九月十一日午後三時、無線の定時交信時間丁度に東方より突然、九二式重機関銃の「ドッ、ドッ、ドッ………」という重い射撃音と共に軽機関銃、小銃の激しい銃声が数分、同時に無線の入電あり。

「双木橋ニ於イテ三〇〇ノ敵ト交戦中」

簡単な電文である。以後銃声も消え、元の静かな宜興に戻る。

当然簡単に撃破して帰港途中と判断せるも、以後の連絡が無いため、本部無線手は必死の呼び出しにも全く応答なし。徒歩で帰還出来る時間を経過しても何ら連絡なし。深刻な事態が発生したのか、無線室は異様な雰囲気にも包まれ、朝から快晴の「宜興晴れ」は何時の間にか暗雲がたれこめ、強風が窓を打つのに誰も気がつかない。外は横殴りの雨も加わり、我が部隊の運命を嘲るが如く暴風雨気象となる。

搜索隊の編成も終り、中国側民衆の好意により配船も完了したが、風雨激しく出航不能。翌朝は台風一過、前夜と打って変わった快晴。大勢の戦友に見送られて異常な緊張のうちに朝もやをつけて双木橋に向かって出発した。

午前七時早くも第一報入電。

「双木橋ニ到着セルモ交戦ノ形跡ナシ。調査ノ上追報スル」  
何という事か、四七大隊の五〇名が昨日の電信を最後に暴風雨と共に何れかに消えたのである。息の詰まる思いで第二報を

待つ。

第二報入電。

「付近住民ノ話ヲ総合スレバ、昨日日本軍ハ殆ド全滅。遺体ト共ニ重傷者、捕虜数名ヲ船ニ乗セ何処カニ出発。行方ハ不明」  
暗号班長は手が震えて解説に手間取る。昨日から危惧していた深刻な事態が発生したのである。

両岸は見渡す限り黄金の稲穂が垂れ下り、のどかな江南の田園風景の中を宜興へあと十キロ、当然充分な警戒はしていただろうが、突然左右から狙い定めた敵の十字砲火をあび、応戦の暇もなく一瞬のうちに阿鼻叫喚の地獄絵となり、戦慄な恐怖の中で戦友を励まし冷静沈着、咄嗟に電文を書き、暗号に組み打電することは、誠に神業とも思える至難の作業で、通信兵として最後を全うし、次々と戦友が斃れるなかで銃をとって応戦。己も敵弾を受けて即死、或いは致命傷の苦しみの中で、はかない二〇有余年の人生が頭の中を駆け巡り、肉親の深い愛に思いを走らせつつ青春の血を流し終えた戦友もいたに違いない。

最後に母親を呼びつつ涙ながらに息を引き取る戦友が多いという。

終戦後一か月も経過し、蘇州に近い片田舎で日本軍兵器の横取り作戦の犠牲となり、死を睹さねばならない悔しさに、さぞ無念の最後を遂げたに違いない。

建軍以来最初にして最後の「無条件降伏」という厳しい事実

に、第一線の兵隊として不安におののきながらも、誰しも復員の夢を抱いていたのである。

軍としては報復の兵を挙げる事も出来ず、悲憤慷慨し部隊中が暗い悲しみに包まれていた十二日午後三時頃、宜興城南西の歩哨から、「白旗を掲げた二名の新四軍と、日本兵らしき者一名が部隊本部に向かって来る」との緊急通報あり。

部隊本部は俄に騒然となり、これを見ようと衛門に駆け出す者あり。

堂々とした新四軍の将校と捕虜になったM伍長である。映画を見ている様な光景であるが、厳肅な雰囲気の中に彼等を迎え入れる。

交渉模様の詳細は不明なるも、戦死三〇名、重傷者を含む捕虜二〇名は交換条件として相当の兵器が要求されたようだ。

九月十五日無錫からの救援隊も到着。いよいよ一か月振りに蘇州の集中營に向かって撤収作戦の開始である。

いやな思い出の数々を残して後ろ髪を引かれる思いで宜興城を出発する。部隊全員を乗せた長い船団は一キロ以上にも達し、一日中敵の嫌がらせか散発的に銃声があり、退却しながら攻撃される恐ろしさを体験しつつ長い長い一日を送ることになった。

九月十八日全員疲れ果てた姿で蘇州に到着。総ての兵器が接収され、私は通信関係の任務が完了後、英霊の護衛責任者となる。

双木橋事件の尊い戦死者は、新四軍に於いて葬られた為御遺骨がなく、例の「桐の小箱」には御本人が使用した下着と印鑑のみ、戦死者は燃料がなく小指程度の火葬で、形ばかりの軽くて小さい御遺骨のため復員後大変な問題が起きた。

六畳程度の部屋を与えられ、ここに三段の祭壇を造り約五〇柱の英霊を安置。ほとんど空の御遺骨箱と知りながらも起居を共にした当初は、厳肅のうちにも恐怖が先立ち、特に夜半廁(かわや)トイレ)から戻りドアを開けると、五〇柱の英霊が一斉に注目する錯覚に陥り、恐ろしさに背筋が硬直して足が進まず、床についても戦死した戦友が語りかけてくる様で寝付かれず、一か月程睡眠不足となった。

一方生き残った我々中国派遣軍は、中国側から全く信じられない寛大な処置、即ち「暴に報ゆるに暴を以ってするなかれ、既往をとがめず徳を以って怨に報いる」という有名な仁慈あふれる『以德報怨』の宣言を終戦と共に間髪を入れず発表し、日本軍人の速やかな帰国を提案。直ちに実行に移し殆んど軍人が復員出来たのである。

(中略)

二一年三月下旬、部隊全員博多に復員上陸。帰京してから一日も早く御遺族に報告せねばと体調を整え、心の準備をと思案する間もなく、早くも次々と御遺族から連絡があり、如何なる美辞麗句を並べて死を美化しても御令息が戻る訳でもなし、却

って失礼になり悲しみをそそるだけと考え、誠心誠意当時の実情を正確に申し上げるだけに留めたが、戦後の戦死については最後まで御理解を得られず、充分なお慰めの言葉を申し上げられなかった若輩の憐れな自分の姿を思い浮かべ、今もって申し訳なきに心を痛めている。

父親が大工さんのため、一人息子を立派な技術屋にと早大の理工科を卒業させ、復員を鶴首していた御遺族、お家は戦火に焼かれ写真もなく、全く希望を失った初老の御両親の悲しみは絶頂に達し、軽い御遺骨を突き付けられ平身低頭、玄関で土下座をしてお詫びしたが聞き入れられず、追い返されたお家である。

三悪に耽る弟さんを終戦間際にきた兄さんの軍事郵便で、元気に復員を信じて父親は村会議員の名誉のため、親族会議を開いて弟さんを勘当、僅か数か月後に御遺骨が届き途方に暮れた御両親。

入営前、双方の親から結婚を反対され、熱海の自殺の名所「錦が浦」で泣きながら手を取り合って投身寸前、警察官に引き止められ、署長から「銃後を守る立派な花嫁の鑑み」と讃えられ、両親の説得に協力、晴れて結婚して来たのに不運にも蘇州で赤痢にかかり、水筒一つを持って無理をして上海まで来たが、病状が悪化、帰国寸前に入院、復員船を見送りながら息を引き取る。あまりのショックに病床に伏した若き未亡人に報告せねば

ならぬ若輩の使者は、お慰めする言葉に窮し立往生する。

次々と往訪して御遺族の悲痛な衝撃に対応出来ない私は、昼間お伺いする勇気を失い、最後のお家には失礼をも顧みず夕刻にお伺いした所、お孫さんであろうか、可愛いお子さん二人を中心に楽しい団欒中のご家族の笑顔を見越して、私は恐ろしい爆弾を持って一家を奈落に突き落とす悪役になり切れず、幼児の笑顔が妖気の如く迫って来るようで、何時の間にか踵を返して暗い裏街を一時間もさまよっていた。気を取り直してお伺いしたが、可愛い無邪気な幼児の「笑顔」がこれほど恐ろしいと感じたことは初めてであった。

僅か数名の御遺族を往訪して、掛け替えない御令息の戦死、戦病死に御遺族でなければ分からない深い悲しみは筆舌では表現出来ず、悲劇の中で地獄を見るが如し。戦争の罪悪を身を持って体験し、御遺族の悲劇を目の当たりに接して来た私としては、「戦争は絶対に反対しなければならない」と痛感している。

国のため正しいと思った戦争に、我々は兵隊として遠い中国に派遣され、多くの戦友は青春の夢も希望も叶えられず、それも終戦後の不幸な事件の犠牲となって国のため虚しく異国の見知らぬ片田舎で尊い若者の血を流し骨を埋めて来たのに、それが一様に「侵略の加害者」と烙印を押されては、戦死者を冒瀆するものであり、絶対に許せないのである。

つらい悲しい話でも戦死、戦病死した幾多戦友の貴重な体験

を、文章の巧拙はどうであろうと書き残す事は、戦争を共にした私達の義務であり、使命であると思う。

彼らのお陰で戦後平和な経済大国日本になって幸せな生活ができる我々は、生きながらえる限り感謝を忘れずに心から冥福をお祈りする次第である。

合 掌

